目次

巻頭言　　　　　　　　　　　　　　　実用英語教育学会　会長　　　釣　晴彦

第 8 回 実用英語教育学会（SPELT）研究大会　（2019 年 2 月 23 日）

１．基調講演　「小学校英語の今，そしてこれから」

萬谷 隆一（北海道教育大学札幌校）

報告　　実用英語教育学会　石川　希美

２．招待発表　「地方大学における留学生の人的リソース共有化による異文化交流実践」

小野 真嗣（室蘭工業大学）

報告　　実用英語教育学会　竹内　典彦

３．実践報告　「『おもてなしを儲けにつなげる英語教室』― 地域活性化のための成人向け英語教室を成功に導くマーケティングの観点」

久野 寛之（札幌大谷大学）

４．フォーラム

「2020 年東京オリンピックと日本の英語教育
―これから地方でしたいこと・できること―」

司会・進行：釣　晴彦　会長（札幌学院大学）
パネリスト：萬谷　隆一（北海道教育大学札幌校）
小野　真嗣（室蘭工業大学）
久野　寛之（札幌大谷大学
山崎　秀樹（北海道千歳高校）

【連載】小学校から始まる実用英語教育：

第 14 回「仕草と埋草」プラス「《実用英語》とは？…それよりもっと大事なこと」

実用英語教育学会　　　久野　寛之

お知らせ

2019 年 6 月 29 日（土）　第 8 回 SPELT 研究会開催

巻頭言

実用英語教育学会　第８回研究大会を終えて

実用英語教育学会会長　釣　晴彦
札幌学院大学人文学部 教授

実用英語教育学会第 8 回研究会を終えて、一言ご挨拶申し上げます。

研究大会テーマは、「2020 年東京オリンピックと日本の英語教育—これから地方でしたいこと・できることー」です。

基調講演は北海道教育大学札幌校の萬谷隆一先生が「小学校英語教育の今、そしてこれから」として、講演をして頂きました。萬谷隆一先生は、現在北海道 Super Global High School 事業運営委員長と小学校英語教育学会会長でもあります。小学校英語導入に関しての現状と課題を様々な角度から話されました。まとめにこれからの小学校英語には、指導者養成・研修の充実・整備、担任と専科教員制度の検討、話す聞くことを重視し読み書きにつなげる指導方法、音声のコミュニケーション、言語活動を通した小学校英語、小中連携等の必要性を強調されました。学会もこの指摘された視点を研究テーマの中に考慮して活動していきたいです。

続いて招待発表として室蘭工業大学の小野真嗣先生が「地方大学における留学生の人的リソース共有化による異文化交流実践」として、グローバル化に伴う留学生の出身国の分析から交流事業まで詳しくデータに基づき分析された話は、貴重でありました。政府主導で 30 万人の留学生を 2020 年まで受け入れていく方針であると。大都市と地方都市の地域差も懸念されるが、地方大学での実践例を提示して細かく説明されたのは大変興味深いものがありました。

実践報告では札幌大谷大学の久野寛之先生が、『おもてなしを儲けにつなげる英語教室』—地域活性化のための成人向け英語教室を成功に導くマーケティングの観点」として、実用英語として地域の商業活動を支援する英語教育を実施する上で、マーケティングの観点がいかに重要かつ有用であるかを強調した報告でした。実践内容からいくと発表時間が足りなかったです。

実用英語教育フォーラムは、「2020 年東京オリンピックと日本の英語教育—これから地方でしたいこと・できることー」というテーマで、筆者が司会・進行を勤め、パネリストとして萬谷隆一先生、小野真嗣先生、久野寛之先生、山崎秀樹先生で行いました。小中高大の連携プロジェクトとして具体化するとすれば、一体どんなプロジェクトを考えることができるのだろうかと、意見交換がなされました。校種の差やアプローチの多様性もあり、テーマが大き過ぎて短い時間の制限では、統一見解までには至りませんでしたが、英語教育を進めていく上で、大事な視点は共有確認出来たと考えています。

2018 年 4 月から前倒しで小学校外国語活動の試行が始まりました。実用英語教育学会は、2011 年 2 月、北海道で実用のための英語教育に深い関心と経験を持つ大学教員が中心になり、小、中、高、大で教壇に立つ会員が相互につながり、さまざまな領域と水準における英語教育の実践と研究を行い、実用英語の研究を理論と教育実践の両面から推進していく役目として発足しました。その発足当時から事務局長として奔走して頂いた札幌大谷大学の久野寛之先生は、この 3 月をもって大学を去ります。退職後は Web 上の教育機関を設立し、新たな活躍をなさいます。今後は外部からの視点で実用英語教育学会を一層支えて頂くことを強く願っています。

学会は研究、活動を広く共有出来る方々と、手法をさらにシェアして共に学んで歩んで行きたいと考えております。

今後とも一層のご指導、ご支援を賜りますようお願い申し上げます。

第８回研究大会 ＜基調講演＞

小学校英語の今、そしてこれから

萬谷　隆一　先生（北海道教育大学札幌校　教授）

１．なぜ国民全員が小学生から英語を学ぶのだろうか？

１）IT 機器の発達

IT の時代に翻訳機が進化している昨今。その事例として、POKETALK の実物を紹介しながら、その聴衆にこの翻訳機を買えばいいのでは？それとも外国語を学びますか？なぜでしょうか？ と問いかけ、翻訳機のメリット・デメリット、外国語を学ぶ意義を考えました。

２）英語の必要性

社会人にとって英語が不可欠か？という点では、日本の現状では、英語使用者の割合は必ずしも多くありません。また、英語使用者は減少する傾向がみられます（寺沢、2015）。また、英語は「国民にひろくあまねく」教えるものなのか、「一部の人間が高い能力をみにつける」ようにするべきなのか？という視点からも、聴衆のペアワークを行いました。そのうえで、英語を学ぶ意義は？「人間にしかできないことは何か？」という大きな視点から考えてみることを挙げられていました。

２．小学校英語の現状と課題

それでは、小学校英語が置かれている状況を見てみましょう。

１）タイムライン

文科省の「外国語教育の抜本的強化」の施策に基づき、2018（平成 30）年度は、移行措置期間であり、小学校中学年でも年 15 時間の外国語活動が始まりました。さらに、2020 年度からは完全実施が開始され、小学校 3，４年生で年間 35 時間、5，６年生で年間 70 時間を学ぶことになります。

道内の事例では、札幌では 3，４年生は年 20 時間（2018 年度）⇒30 時間（2019 年度）⇒35 時間（2020 年度）、5，６年生は年 55 時間（2018 年度）⇒60 時間（2019 年度）⇒70 時間（2020 年度）と段階的な動きがみられ、旭川・上川地区すでに年 70 時間で実施しているそうです。

このような状況について、現場の先生方からは、「徐々に時間数を増やしていくのは難しい」、「テキスト教材を限られた時間数の中でどこまで取り扱うのかは悩ましい」と言う声が紹介されました。

２）教員研修

小学校教員が英語を教えていくためにはどのような研修が行われているのでしょうか。大きく２つ挙げられます。１つは「リーダー研修（カスケード研修）」で、これには３つのタイプ（①国による中央研修、②自治体でのリーダー教師による研修、③校内研修）があります。２つ目は自治体独自の研修で、北海道、札幌など各市町村単位で行われるものになります。

他には、免許法認定講習で、北海道教育大学で実施している「小学校教諭のための中学校英語２種免許講座（14 単位）」があります。この講習に参加するために、先生方が道内各地から毎週いらっしゃっていた実例も紹介されました。今では、英語の専科教員の採用をするケースも出てきているそうです。

３）教員養成

小学校教員養成課程では「小学校教員養成　外国語（英語）コア・カリキュラム」を適用していきます。2019 年（H31）度からは、「初等英語」、「初等英語科教育法」の２科目が必修化となります。つまり、教員免許を出す大学においては、このような科目を実際に設置して指導していくことになります。

４）教育現場では－拠点校事業と専科教員－

一方で、現場では英語教育推進研究拠点校事業（拠点校事業）が行われてきましたが、今は減少傾向にあります。道内では、寿都町、厚真町の学校の事例が良く知られています。

また、専科教員として英語の指導を学級担任に代わって指導するケースも、外国語活動では 12～13%程度見られます。（平成 27 年度公立小・中学校における

教育課程の編成実施状況調査）

専科教員は、教員の得意分野を活かして実施する、中・高等学校の教員が兼務する、非常勤講師が実施するなどさまざまな場合があります。小学校で英語を教えるのは、担任がいいのでしょうか？専科教員がいいのでしょうか？この点について、聴衆のみなさんでグループワークを実施して話し合いました。研究調査では、小学校教員、中学校英語教員ともに専科教員の配置の希望が多数派ですが、英語指導年数が少ない教員ほど専科教員を希望する傾向が強く見られます。

実際、専科教員と一口に言っても多様であり、１）校内で調整して教科担任を持ち合いしている場合、２）自治体独自予算で巡回あるいは常駐の英語専科教員を加配措置している場合、３）国の加配制度を利用している場合などがあります。３）の国の加配専科教員は、平成 30 年度は全国で 1,000 名（小学校は全国で２万校ですので、専科教員はまだ少ない）で、札幌市や道内にも配置されています。話し合いの場面で、専科教員と担任でティームティーチングはできないのだろうか？という指摘がありました。上記１）や２）ではそうした協働を工夫する余地はあるものの、３）の制度では、現状ではそのようなことはできないそうで、働き方改革による制限の一例とも言えます。また３）の専科教員には、授業は週 24 時間のノルマがあり、複数校を担当することから、一人で 600 名～1,000 名の児童を指導・評価をする例もあるそうです。平成 28 年度英語教育実施状況調査では、小学校で外国語活動の指導にあたるのは学級担任である場合が 95％程度で圧倒的多数と言うこともわかっています。

結局のところ、担任と専科教員のどちらに指導してもらうのが望ましいのかというのは、英語教育の目標として何を目指していくのかによって方向性が変わります。具体的には、児童の英語力向上を目指すのか、コミュニケーション力の向上なのかという視点です。児童の指導に従事するという点からは、どちらの教員であっても児童理解と英語力のバランスが肝要です。英語力と言う点では専科教員の優れた点を活かしつつ、担任教師の成長を支えるような支援にあたるのが望ましいと言えるでしょう。

５）小学校英語の指導

教材としては、札幌市小学校教育課程編成の手引きによると、“Hi, friends!” と “We Can!” から取捨選択して、混合して指導しています。

読み書き、特に文字を書く指導では、小学校ではいきなり書かせることはせず、必ず例を見ながら、そして音声に慣れてから書かせる工夫が必要です。また、スピーキング指導においては、音声活動において十分に事前練習を行うこと、つまり音声で伝えあうことを重視していくことが大切になります。十分な練習がない場合、ただ書いた文を読む（読みニュケーション）に陥ってしまっている事例が見られます。音声活動を中心にしながら、文字も提示する学習形態をとることで、英語を聞くことが得意になる傾向も研究結果からわかりました（相馬・大和田・萬谷、2016）。

先生が説明して、子供たちが英語をリピートすることに終始する授業ばかりにしてはいけないと考えています。「やりとり中心」の授業にしていくうえでは、意味が分かる場面設定があるなかで、やり取りを通して、表現を覚えていくような進め方が重要になります。児童の理解につながるような工夫としては、教師の例を出してから子供に尋ねていくことによって、子供に気づきを促すような帰納的な指導が大切です。これは、教師が一方的に説明して教えるのではなく、言葉の仕組みや文法（文構造）に対してやりとりを通じて気づかせ理解させていくやり方になります。

このような方法は、①適度な好奇心を刺激する（どんな仕組みになっているかという疑問を大切にする）、②自制的な言語形式の指導を行う（言葉の決まりを細かく説明しすぎない）、③正確さの要求を自制する（練習や伝達活動で正確であることを過度に求めない）、④期待感を持たせる（中学校になって英語の勉強をすると、もっといろいろなことが伝えられるし、わかるようになるという期待を持たせる）ことに繋がります。

３．まとめ

以上のことから、これからの小学校英語を考える上で重要な点をまとめると５点が挙げられます。①指導者の養成・研修の充実・整備、②担任と専科教員制度の検討、③話す聞くことを重視し、読み書きにつなげる指導方法、④音声のコミュニケーション、やりとりの言語活動を通した指導、⑤小中の連携になります。

（文責　石川希美　札幌大谷大学 准教授）

＜招待発表＞

地方大学における留学生の人的リソース共有化による異文化交流実践

小野　真嗣　先生（室蘭工業大学　准教授）

大学院工学研究科と国際交流センターに所属する小野先生に、豊富な統計データとともに、「留学生リソースの共有活用による多地点異文化交流を通じた地方大学外国語学習再起」という科研のテーマについてお話をいただきました。室蘭工業大学の他に苫小牧高専と函館高専を含む取り組みで、16 か国の留学生と 3 校の日本人学生が、函館と大滝で活動をともにする取り組みをご発表いただきました。以下が発表の概要です。

1　社会的背景

今回の研究大会のテーマである「2020 年東京オリンピックと日本の英語教育―これから地方でしたいこと・できること」であるが、本発表の「異文化交流実践」は「グローバルの時代において、地域で国際性涵養に向け、外国人とも仕事ができる能力を身につけてもらうための創意工夫」と観点から取り組んだものである。キーワードは「外国人」「地域視点」「国際性」であり、その背景には「留学生 30 万人計画」がある。

「オリンピックと英語」という観点では、「グローバル化に対応した英語教育改革」が必要であり、国は「アジアの中でトップクラスの英語力を目指す」としている。これまでの中学校卒業時に英検 3 級以上 50%、高校卒業時に英検準 2 級または 2 級以上 50%という目標から、生徒の特性に応じて高校卒業時に英検から準 1 級、TOEFL iBT60 点以上を設定している。また、先進的な学校ではタブレット、PC、電子黒板、テレビ会議システムを活用するとしている。また人的リソースとしてはネイティブスピーカーや地域の語学に堪能な人材に協力してもらうべきとしている。

「留学生 30 万人計画」については、2020 年までに留学生を 30 万人まで増やそうという計画であり、今後は少子化の影響で高等教育機関の学生数は 300 万人程度と予想されるので、その一割を留学生にして、先進国の留学生受け入れ割合と同程度にするという目標である。

統計データとして、日本の在留外国人数は 264 万人程度である。上位 5 か国は中国、韓国、ベトナム、フィリピン、ブラジルである。現在の高等教育機関及び日本語教育機関に在学している留学生は、JASSO （日本学生支援機構）による平成 30 年度の調査によると、298,980 人であり、一見 30 万人という目標をほぼ達成しているように見えるが、大学院、学部、短大、高専に限ると 14 万人に満たない。出身地域別では 93%がアジアである。北海道大学は留学生受け入れ数が 2,100 人程度であり、全国で 11 番目となっている。一方で室蘭工業大学の留学生受け入れ数は 187 人であり、この環境で実践的な英語使用を通じた交流を図る仕組みを考える必要がある。

国は国立大学における国際化推進のために、2020 年までに外国人留学生を在籍者の 10%にするという目標を立てている。現在の室蘭工業大学は 6.2%であり、国立大学全体では 2018 年 11 月現在 7.7%である。まだ目標に達していない。一方で国は、日本人学生の海外留学を在籍者の 5%にせよという目標を設定している。室蘭工業大学では 2%である。国立大学全体では 5.3%と目標を達成している。さらに英語での授業科目を倍増せよという目標に対しては、全国の国立大学では学部については倍増し、大学院に関しては 3 倍増となっている。

2．留学生シェアリング

2017 年度から 3 年間にわたる科研のテーマとして「留学生リソースの共有活用による多地点異文化交流を通じた地方大学外国語学習再起」に取り組んでいる最中であり、その中間報告をする。

室蘭工業大学と苫小牧高専と函館高専の日本人学生と 16 か国の留学生が、函館と大滝で活動をともにしながら、英語「で」コミュニケーションをとる取り組みである。すなわち英語「を」学習するのではなく、英語「で」様々なことを学び、活動するのである。

2017 年 12 月は函館で 1 泊 2 日の活動を行った。1 日目は自己紹介のあと「国際人とは何か」というテーマで話し合ったり、指定された国や地域を調べプレゼンをした。2 日目は函館、室蘭、苫小牧の都市計画について講義を聞いた。その後異文化理解のための活動、函館高専生による函館散策案内の後の函館史跡の散策、異文化に対するふりかえりを行って終了した。

昨年 10 月は、大滝で 2 泊 3 日の活動を持った。1 日目は自己紹介、自然災害の意識と災害経験の情報共有、2 日目のバス学習の準備で終えた。2 日目は、有珠山噴火の被災地区、洞爺湖ジオパーク、ビジターセンターをそれぞれ見学、そのふりかえり、留学生の自分の国における自然災害の事例発表、グループに分かれて工学的視点による防災・減災のためのポスター発表準備を行った。3 日目は、ポスター発表の準備の後、グループによるポスター発表を行った。最後に活動を通じて得られた異文化理解についてふりかえりを行って全日程を終えた。

３．日本人学生の意見

アジア圏の国の情報を得られて、その国に対するイメージが変わった。異文化にふれることができた。チームワークとリーダーシップを学んだ。実際の体験と交流もたいせつな勉強である。意見交換も大切。それぞれの国の生活と文化について直接聞けたのは貴重な経験だった。留学生は、英語にしろ日本語にしろ、間違いを恐れず積極的に使用していると感じた。他国の人々に対して思いやりを持つことと教養を身につけて「国際人」になれるよう努力したい。ポスター制作の活動を通して異文化をより身近に感じることができた。研修以外でもコンタクトをとれたらよいと感じた。大滝の合宿は函館合宿より 1 日多かったのでグループワークの時間が多く取れ、しっかり話し合うことができたのがよかった。英語はとても大切なので、これからもしっかり勉強しようと思った。母国語が英語でないのに英語をペラペラ話している留学生にとても驚いたし感心した。英語学習に対するモチベーションが高まった。留学生は、話す相手によって言語をスイッチしている様子にとにかく驚いた。

４．留学生の意見

自然災害について、他の国の学生と話し合ったことはたいへん有意義だった。インドネシアの地震、タイの水位上昇による洪水、ベトナムの洪水、インドの砂漠化についてそれぞれ学んだ。ポスター発表のために他のメンバーと協力して準備をできたのがよかった。日本人学生だけでなく他の留学生とも交流できたのがすばらしかった。このような交流をするために、英語を積極的に話すことは大切である。外国語を理解できることで多様な文化や生活を知り、人生を変えるような経験ができる。マレーシア人の自分が隣国のタイの災害について知らなかった。

５．今後の課題

LMS（Moodle）による情報交換、Skype などによるテレビ会議での交流などがある。

（文責　竹内典彦　北海道情報大学 教授）

＜実践報告＞

「おもてなしを儲けにつなげる英語教室」
― 地域活性化のための成人向け英語教室を成功に導くマーケティングの観点

久野寛之　先生（札幌大谷大学　教授）

1. 発端

この実践は、地域と大学の連携（以下「地大連携」）活動の一環として、某小都市の中心市街地商店街の振興のために実施した。商店街のインバウンド観光客対応力を強化するために、個店の店主や従業員に参加を呼びかけ、試験的に、4 回完結各 90 分の英語教室を開催した。8 名の受講者が集まったが、年齢はもちろん、英語の知識も運用能力もまちまちで、学ぶという行為そのものへの態度にしても個人差が極めて大きかった。その 8 人が満足できる教室を作るにはどうしたらよいのか。この問題を解くカギになったのが、ネットで見た某「ビジネス英会話強化合宿」だった。

この合宿は、海外でのビジネス展開、外資系会社の採用面接準備、英語での司会業開設などといった具体的で明確なビジネス上の目的のために英語を学ぶ必要のある学習者のための 2 日間の集中トレーニングだった。しかし、その 2 日間の合宿に先立って、指導の全責任を持つ講師が受講を申込んだクライアントとの徹底したカウンセリングを 2 度にわたって行い、そのクライアントの英語力を把握した上で、学習目的を達成するために必要な言語（語い・表現）を徹底的に絞り込みながら、その講師とネイティブがシラバス（学習項目の総体）を作り、そのシラバスに基づいて、学習者自身に目標を設定させ、立てた目標に責任を持たせるというものだった。

私がこの英会話合宿を自分の英語教室のコンセプトモデルとしたのは、その効果が「学習目的・目標に応じた最低限の語彙への絞り込み」と「学習者自身による目標設定」の 2 点によって担保されている点だった。私も、その 2 つの柱を基本として 4 回の各 90 分の英語教室の設計を行った。

2．関心・研究課題

「おもてなし英語」というのは、本来中学英語の知識があれば誰でも話せるはずだが、当然、中学英語を使いこなせる人とそうでない人がいる。しかし、「(英語を話すことで) おもてなし（の心を表し、それ）を儲けにつなげる」というのは、そういう目的で中学英語を使いこなすことを考えない限り、誰にとっても馴染みはないことだろう。だとすれば、「儲けにつなげる」という目的を主な共通項にし、さらに各学習者の具体的な目的の中でも共通する部分をまとめて今回の英語教室の学習項目を決めていけば、年齢、職業、業種、学習時間などの個人差を超えたところで、参加者全員に満足のいくプログラムを構築できるのではないかと考えて計画を立てた。

全体的目的を「英語を話すことで、お客様との関係が構築できて、再来店につながるようになること」とし、具体的な目的を、(1) 気持ちよくお店に入り、気持ちよく出て行っていただく、(2) いい買い物をしたと満足していただく、(3) また（誰かと一緒に）来たいと思っていただくとして、「買い物」と「道案内」という 2 つの場面を学習してもらうことにして、実施した。

3．結果

(1)概ね成功―次年度へ継続

今回の英語教室では、予習・復習はほとんどなく、90 分を 4 回の授業だけで、ネイティブとの接触は 4 回中 2 回の合計 3 時間しかなかった。ただ、大学生ボランティアの協力を得て、毎回 7～8 人に 2 人がついて、「当たって砕けろ」の会話練習を行った。参加者は 30 代～80 代で、もう何年も英語の勉強から遠ざかっている人たちばかりであった。学習者の時間的制約により、私の英語教室の効果を測定する

ための事前事後のテストもできず、簡単なアンケートを授業外に商店街の方に行ってもらうにとどまった。それでも、主催者の商店街が取ったアンケートを見ると、ほぼ全員が概ね満足してくれたようだった。全員が「儲けにつなげる」ための英語が一般的な英語とは違うということや、その目的にふさわしい語彙や表現の習得に注力することの意義を理解してくれた。また、全員が「(英語が不完全でも)何とかなるものだ」という感覚を身につけたようで、回答者７名のうち４人が「また参加したい」と答え（超高齢者の１人はアンケート用紙の片側だけしか回答しなかったが、おそらく「また参加したい」と答える)、２人がまた「(次も参加しなくても、)ジェスチャーなどを使って頑張れると思う」と答えた。初回に参加した８名のうち、７名がこの４回コースを完走した。以上のことから、この４回シリーズの試行プログラムは概ね成功したと見え、商店街は、次年度は回数を増やして第２弾を実施する計画を立て、予算化した。

(2)クラスでの外国語指導の最大問題である学習者の個人差―特に習熟度差の克服

授業内容には、マーケティングの観点を入れ、目的とする言語行動を必要最小限の語彙・表現で遂行できるようにした。これによって、「儲けにつながる英語」を習った人はいないため、皆が同じレベルで学べることが増えた。習熟度の低い学習者でも理解できる簡単な英語で授業ができた一方で、上級者でも、簡単な語彙・表現を「なるほど、そんな風につかえば“売れる”かも」という新鮮な驚きをもって学んでもらうことができた。実際に、参加者間の英語能力の差について言及した回答は、「英語に苦手意識があったり、そもそも基礎力がすごく低いので言っている事が分からない事が多少あった。」というものだけであった。

４．これからの英語教育に生かせる教訓

本来効果があるはずの様々な教授法がどれもそれほどの効果を上げずに終わる理由の一つが、子どもたちにとって英語学習が自分のものになっていないからではないかと考えている。学校教育としての英語教育から一線を画し、成人のための英語教育を考える過程の中で、次の３つのことに気づかされた。

（1）目的を明確にすることの重要性

今回は、「最低限これだけは必ず覚えなさい」というところまで学習者毎の必須語彙の精選、絞込みを行う余裕がなかった。しかし、そうすることが学習動機付けを高めるということは、自分の大学の授業で試験的に行ってみて、わかりかけてきた。教科書の呪縛からなかなか抜けきれなくても、学習者に「この課を何のために学ぶのかを考えてみよう」と投げかけ、Can-Do リストを参考にさせながら、自分の学習目的を書き出させ、可視化して、常にしっかりと意識させておくことは可能であり、絶対に必要だと感じている。

（2）目標を自分で設定することの重要性

また、今回の英語教室のモデルとなった某「ビジネス英会話強化合宿」のように自分で目標を立てさせることが言語習得を促進するという研究もすでにあり、自分自身の試行的実践の中でもその手応えを感じている。学校で教科書を使っている場合、ただ漫然と予め決められた順番で各課の内容を学ばせるのではなく、各課で自分なりの学習目的を持たせ、その目的を達成するにあたって、具体的にどんな目標を設定するかを自分で考えさせ、常に達成度を自己管理させ、今自分がどの地点にいて、これから何をしなければならないかを意識させることが重要であることを再認識した。

(3)コースデザインの基本を忘れないことの重要性

本来、外国語を教える教員は、冒頭で述べた某「ビジネス英会話強化合宿」の講師のように、①学習者一人一人のニーズ分析（目的、目標、既得能力、学習時間、学習方法等々）を入念に行い、②ニーズに合致した言語を教えるための目標言語調査を行い、③調査データに基づいて、学習項目の総体としてのシラバス（広義のシラバス）を決め、④教授法（教科書の選定を含む）を決め、⑤スケジュール（狭義のシラバス）を決定する。しかし、文科省の指導要領や学校のカリキュラムに沿った質の良い選定教科書が所与のものとして存在していると、そのような作業過程を辿ることはほぼ不要になる。結果的に、その教科書を使って、コミュニカティブな授業をすることにばかり心を奪われ、学習者のニーズにどう応えるかよりも、教授者がどうしたらより良い授業ができるかに注意が向いてしまう。普段の授業での、そんな本末転倒の自分の姿に今回気づかされた。

＜実用英語教育フォーラム＞

「2020 年東京オリンピックと日本の英語教育
―これから地方でしたいこと・できること―」

司会・進行：釣　晴彦会長（札幌学院大学）
パネリスト：萬谷　隆一（北海道教育大学札幌校）
小野　真嗣（室蘭工業大学）
久野　寛之（札幌大谷大学）
山崎　秀樹（北海道千歳高校）

フォーラムのねらい（当日のプログラムより）

オリンピックは１都８県で行われます。北海道は、札幌ドームでサッカーの競技場を提供することになります。オリンピックに先立って、今年の９月にはラグビーワールドカップが札幌ドームで行われます。So what?（だから何？）ですね。結局のところ、東京オリンピック、パラリンピックというのは、サッカーの試合の開催地となる札幌の人たちには関係するかもしれないけれど、北海道のその他の地域にとっては、大して関係のないもので終わってしまうのでしょうか。それとも、関係のあることにしなくてはいけないのでしょうか。現在の全国の状況を参考にしつつ、2002 年のサッカーワールドカップや 2017 年アジア冬季競技大会のことを思い出しながら、こうした国際イベントと子どもたちの英語学習や英語教育との接点はどこにあるのか、どこにあるべきなのか、小中高大の教育者が一緒になって考えてみると、何か見えてくることがあるのではないでしょうか。それが第８回実用英語教育フォーラムのねらいです。

釣：小野先生より様々な統計データをご紹介いただいたところだが、外国人留学生は圧倒的にアジアの国からが多いということがわかる。新千歳空港の利用者は年間２千万人を超えているがそのうち外国人は 300 万人を超えている。そのうち 90%以上がアジアからである。小学校英語教育は 2020 年から３、４年生が外国語活動として 5､6 年生は科目としてスタートする。一方で文化庁は文化芸術推進基本法を策定し、昨年３月に法案が国会を通った。2018 年より５年計画で進めるとしているが、その柱の１つに「国際化」というのがある。千歳市でもそれをどのように進めるかということが議論になっていて「生涯教育」ともリンクしている。問題なのは、縦割り行政の弊害で、この動きが文科省とは別であることだ。2020 年にオリンピック・パラリンピックもあるし､「グローバル化」が話題になっているが、文科省が司令塔なのかそれとも臨教審なのか、はっきりしないということもある。こんなふうに、まとめ役の国がまとまっていない中で、オリンピックを目前にして、われわれ地方はどんな姿勢で地域におけるグローバル化を考えて行けばいいんでしょうかねぇ。

萬谷：若いころから外国に行ったりして、いろいろな外国の人と付き合いがある。日本と韓国では今いろいろと難しいこともあるが、これまで接した韓国の人の中には、とても親しい友人もおり、その人の顔を思い出すと、ふと外国の国を一つの事象からだけ見るのはどうかなと気づかされる。そのことから感じるのは、国と国の交流というよりは個人と個人の交流や関係を大切にすべきと思う。外国人の労働者がこれから増えることも予想されるが、それは学校に外国人の子どもたちが増えていくということ。その際は､「あの国の人はこうだ」ではなく、個人と個人のつきあいが大切だと思う。

現在北海道にも大勢の外国人観光客が押し寄せているが「よそ者が来ているな」という受け止め方もあるのではないか。そこで提案

したいのは「声かけ運動」ができないかということだ。以前台湾を訪れたときだが、台北では外国人に対して「声かけ運動」というのがあり、私も声をかけられ、目的地まで案内してもらったことがある。「声をかける」というのは街中でも、学校でも大切で、よそ者扱いしないで個人と個人が交流することが重要だと考える。

小野：個人的な話だが、学部時代にカナダに留学した時に知り合った人が、現在熊本文徳高校に勤務している。マーク先生というのだが、昨年８月に 20 年ぶりにお会いする機会があった。その縁により室蘭工業大学で「学生に海外に目を向けさせるようなお話を」とお願いして、今年２月に講師として来ていただいた。講演のタイトルは「出会いは人生のターニングポイント」であった。講演の前の授業で私は学生に「20 年前に私がカナダでマーク先生と出会い、その出会いがあったからこそマーク先生は君たちに話をしに来てくれる。君たちも将来留学するかもしれないし、その時に知り合った人と縁が続き、このようなことが起きるかもしれない」と話した。もちろん 20 年前に今回のようなことが起きるとは想像できなかったわけだが、個人と個人の関係が大切であるという１つの実例になったのでは、と考える。

一方で地域のことだが、白老では「国立アイヌ民族博物館」が2020年にオープンする。そう考えると、それぞれの地域に、「異文化」にふれる機会や「多文化共生」を意識するリソースが意外と多くあると感じていてそれらを有効利用すべきだと思う。

久野：以前提案したアイデアである「北海道ランゲージマップ」だが、「北海道のどこに英語や他の外国語ができる人がいるか」を調べて作成するプロジェクトだ。今でも実現したいと考えている。地域が国際化するためには、地域の子供たちが、何か「体験」や「きっかけ」や「出会い」がないとスタートしないと感じている。先生方が教室で子どもたちに「もし外国人と出会うことがあればどうしたらいい？」という問いかけをして考えさせることが必要だと思う。いろいろと現実の問題で余裕がない子どもたちも多いが、一言でも温かい声をかけられるような教育が必要だと考える。先ほど紹介した社会人のための英会話でも、来店した外国人に May I help you? ではなく、Welcome to my shop! 最初に声をかけるだけで、打ち解けやすくなると伝えた。地域でも学校でも、外国人や留学生との直接交流を疑似体験できるようなゲーム性のある取組みをするなどして、普段から外国人に声をかけやすくなる環境を作ることが大切だと思う。

山崎：昨年北海道でも地震があったが、その時に外国人に対して十分な情報が提供されなかったという問題があった。また観光のこともある。異文化理解、多文化共生、多様性の受容が叫ばれている。今年は日本でラグビーワールドカップがある。札幌ではイングランド、フィジー、トンガ、オーストラリアが試合をする。外国から大勢の人が訪れる。私たちが現在取り組んでいるテーマは「Indigenous Tourism（先住民族の観光)」である。地元北海道の先住民族であるアイヌの人たちの文化や伝統について理解を深めていきたいと考えている。

ワールドカップ参加国で札幌に来るトンガ、フィジーはポリネシア系であり、ニュージーランドのマオリもポリネシア系である。そのニュージーランドのラグビーチームであるオールブラックスで有名なハカ（試合前の踊り）だが（ちなみにトンガやフィジーもハカをする)、あれはマオリの人たちに伝わる戦いの踊りであり伝統的な民族の踊りである。昨年ニュージーランドのマオリの方と交流する機会があった。マオリやポリネシア系の人たちは顔や体にタトゥー（刺青）をするのが一般的である。タトゥーをした人は日本の温泉などの公衆浴場に入れないという問題もあり、以前北海道でも問題になった。タトゥーをした人がもし温泉に入りたいと言ってきたら、私たちはどのように接するべきだろうか。また私たちは北海道の先住民であるアイヌの人たちの踊りや歌を知っているだろうか。それらには死生観があり宗教観が含まれている。多様性の受容が求められている今日、私たちは地元北海道のアイヌ文化を通して「多様性」

についてもっと考えてよいと思う。

高校生はバイトを通して「○○の国の人はマナーがよくない」というような批判をしがちである。そうした声が出ないように、迎え入れるこちら側で異なる文化の習慣や価値観を受け入れる準備をする必要がある。オリンピック・パラリンピックやラグビーワールドカップには多くの通訳ボランティアが参加すると思うが、千歳は空港のある町なので、たくさんの外国からのお客様を迎え入れる。千歳市とも連携をとりながら、どんなことができるかを考えていきたい。

釣：東京と北海道でも温度差があるし、札幌と道内の他の地域でも温度差があると思う。北海道を訪れる人の大半がアジアの人だが外国語は英語だけでよいのかという問題もある。どう考えるか？

小野：自分がなぜ英語を勉強して英語の先生になったかということを思い出すと「ナイトライダー」という映画のことを思い出す。たいへん感動して学生時代に何度も見て英語を勉強した。「コミュニケーション力」とは「人を感動させること（力）」だと言う人もいる。感動という点では「授業で投げ込み教材のような『遊び』の時間を作る」ことも大切と思う。学生には普段のテキストから離れた『遊び』の記憶があとあと残るものである。

久野：理想で言えば英語以外の言語もということだが、英語はリンガフランカだし、英語ができれば十分ではないか、ということでよいと思う。

山崎：外国の方をホームステイで受け入れてくれるように生徒の家庭にお願いした。「日本の家庭を経験したいのでありのままでよいので」と言うのだが「難しい」という家庭も多い。最初は受け入れをためらっていた家庭も、終わった時は「受け入れてよかった」と言ってくれる。海外語学研修でもなるべく現地の人たちと交流できるように工夫している。

萬谷：台湾に行ったときに思ったことは現地の人たちの英語力の高さである。英語がキャリアを広げる意味でも重要と考えているからである。日本においても英語の重要性は高まっているのだから英語中心でよいと考える。小学校から英語教育が実施されるようになった一方で、以前は盛んであった国際理解教育が退潮気味である。異文化理解のためにも国際理解教育はもっと盛んであってよいと思う。

釣：英語中心であることは仕方がないとも思うが、北方領土の問題や、韓国、中国との関係を考えると英語中心であることのリスクを感じないわけでもない。

稲毛知子（札幌旭丘高校）：イギリスに行ったときだが、移民も増えていて英語弱者にとても寛容であると感じた。労働者にも移民が増えていて英語が共通言語になっていることを痛感した。現地のツアーに参加した際、外国からの参加者もみんな英語で会話をしていた。中国や韓国の人たちとも英語でコミュニケーションがとれるのは共通言語としての英語のありがたさである。英語は「宝物」である。

小野：たとえば中国とか海外の英語圏ではない国の大学と協定書を結ぶ時も言語は事実上の共通言語となる英語である。学会や国際会議の使用言語も英語である。そうした点からも学校教育では英語中心の外国語教育でよいのではないかと思う。英語はコミュニケーションツールであり、確かに「宝物」だと思う。

釣：英語はコミュニケーションツールであると同時に外国の文化や価値観を学ぶための手段でもあると思う。そういう面でも英語教育に求められる課題は多いと感じる。パネリストの皆さん、参加者のみなさん、短い時間でしたが、本日はどうもありがとうございました。

（文責　竹内典彦　北海道情報大学 教授）

久野寛之（札幌大谷大学 教授）

第14回(最終回)　仕草(gestures)と埋草(fillers)

いよいよ最終回

右の連載予定表の通り、「第14回」と「第15回」はもともと分かれていて、連載の最終回は、次号の第8巻第1号に掲載することにしていました。ところが、大変残念なことですが、この3月いっぱいで筆者が大学教育から引退するのに伴って、連載も今号で終了することになりました。大変拙い連載でしたが、7年間、都合14回もの長きにわたって連載を許してくださった実用英語教育学会の皆様に心からのお礼を申し上げます。本当にありがとうございました。おかげさまで、連載の開始当初にぜひとも訴えたいと思っていたことはほぼ言い尽くせたように思います。ただ、言いたいことを短くまとめる力量に欠け、ニュースレターの中でも、この連載部分だけがだらだらと長くなりがちだったことを深く反省しております。何とぞご容赦ください。最終回の今号では、できるだけ簡潔明瞭な記事になることを心がけて、花道を飾りたいと思います。

第1回：　○と×
第2回：　数と数字
第3回：　アルファベット
第4回：　“Nice to meet you.” と “Good to see you.”
第5回：　“Excuse me.” と “I’m sorry.”
第6回：　“Sir” と “Ma’am”
第7回：　“Uh-huh”・“Uh-uh”・“Uh-oh”
第8回：　“Yes” は“Yes”, “No” は“No” (1)
第9回：　“Yes” は“Yes”, “No” は“No” (2)
第10回：　ほめる
第11回：　頼む・感謝する
第12回：　同情する
第13回：　誘う
第14回：　仕草と埋草
~~第15回~~：**《実用英語》とは？…それよりもっと**
（最終回）　大事なこと

仕草(gestures)

日本語の「ジェスチャー」は英語の gesture をそのまま日本語音にしたものですが、英語の gesture に「ジェスチャー」以外の日本語を当てるとすれば、「動作、表情」を意味する「仕草」でしょうか。「表情」も「ジェスチャー」なのかと言うと、どうやらそのようです。英語の gesture は、*The Merriam-Webster Dictionary* によると、a movement usually of the body or limbs that expresses or emphasizes an idea, sentiment, or attitude（ある一つの考え、感情、態度などを表したり、強調したりするために普通は身体や手足を一定方法で動かす。その動きのこと）です。この定義で出てくる body には「顔」も当然含まれ、顔を動かすということは「表情」を作るということですから、日本語の「仕草」は確かに英語の gesture と同じ意味を指していると言えます。もちろん、「身振り手振り」と言ってもいいですが、「身振り手振り(gestures)」としなかったのは、今回の連載の「主役」が「埋草」(fillers) だからです。「埋草」との単なる語呂合わせで「仕草」ということばを選びました。深い理由はなにもありません。すみません。

「仕草」にせよ「身振り手振り」にせよ、ジェスチャーが「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度」を育成する上でいかに重要かは言うまでもありません。言葉が通じなければ、身振り手振りでわかってもらうしかありません。その意味では、余興の一つとして人気のジェスチャーゲームは、即興の身振り手振りで言いたいことを相手に伝える実践的訓練としても最高ですね。このゲームは、英語では Charade（シャレイド）と呼ばれ、アメリカの小学校の外国語の授業でも定番の一つです。英語の単語や文を文字に書いて見せ、それを子どもたちに

ジェスチャーで表現させ、それを見た子どもたちが英語に直すのです。

勿論、ジェスチャーは、ことばが通じない時にだけしか役立たないわけではありません。英単語や英文の習得にも力を発揮することがわかっています。実用英語教育学会がこれまで３度にわたってワークショップの後援をしてきた赤坂中学校の北原延晃先生の授業実践では、教科書の音読から発表まで、ありとあらゆる機会にジェスチャーをしながら英語を発話させておられ、それが英語習得に大きな効果を上げているそうです。

埋草(fillers)…どうして？

埋め草というのは、一般には「新聞、雑誌などの余白を埋めるために用いる短い記事や文章」を言う（『現代国語例解辞典』）ようですが、言語学や言語教育では、「空いたところや欠けた部分を埋め補うもの」という意味で、「あのう」、「ええと」、「そうですね」、「何て言うか」、「どうなんでしょう」など、うまく二の句が継げない時に言う短い表現を指す用語として使われています。日本語でもよく耳にしますね。政治家などで、聞き苦しいくらいの人もいます。「この件に、イー、関しましては、アー、その、オー、きわめて、エー、憂う、ウー、べき問題かと、オー」みたいに。英語では、このような短い語句を filler と言います。具体的には、“Well…”、“Umm…”、“Ah/Uh…”、“Like”、“What should I say…” などがあります。他にもありますが、我々日本人に必要なのは、とりあえずは、上の５つくらいです。これらはみな、日本語でなら言えるのに、英語で何て言っていいのかわからない、ことばがそこまで出かかっているのに出てこないというときに使える表現です。アメリカでの生活が始まってすぐのころは重宝しました。紙面の関係上、いろいろな英語の filler の違いについて詳しいお話はできませんが、大事なのは、なぜ filler が大事か、ということです。

一言で言うと、欧米の英語話者は沈黙に弱い、沈黙が嫌だから、ということです。ヤマダ(2003)[1] によると、日本企業の「課長会では沈黙はしょっちゅうで、しかも時間も長かった。平均して一分あたりの沈黙は課長会が五・一五秒に対し、アメリカ人の会話は○・七四秒、最長の沈黙は課長会八・五秒に対し．後者は約半分の四・六秒。この比較から明らかなように、アメリカ人は日本人よりはるかに沈黙に弱い」（p.132）のだそうです。この沈黙は、日本人にとっては、「会話の中断」などではなく、「〈間〉という漢字が『門に日が差し込む』さまを表わすように、言外のコミュニケーションが沈黙に光を投げている」時間であり、「『誰かのものである』発言と違い、沈黙は『誰のものでもない』みんなのもの」として、「相互依存の究極の形といえる」ものだというのです。ですから、「日本人としては、何も急いで沈黙の絆を抜け出すこともない。逆に、なるべく長く黙っていたほうがそれだけ一体感が保持できる」(p.133）と分析します。大変面白い分析ですが、その真偽は他の社会学者にお任せするとして、我々言語教師にとって大事なのは、この沈黙は、いわゆる英米語圏の人々にとっては、やはり「会話の中断」であり、「居心地が悪くてたまらない」(p. 132）ものだということです。だから、英米語圏の人々を不愉快にさせないためには、とにかく何かを言わなければいけないということです。その沈黙の時間を簡単に埋めるための最も簡単な方法が filler を使うことだから、filler が大事だということなのです。

私が教えている学部の現在のカリキュラムでは、１年次の英語の授業は週３回あり、その毎回の授業のはじめの数分で 90 秒の会話をさせています。その Warm-up Talk という帯活動の２大ルールは、「必ず最低３つの質問をする」と、「5 秒以上沈黙しない」の二つです。初めの頃は、「えっと」や「何だったっけ」のような日本語が口をついて出てきますが、意識的に努力させれば、前期の期末テストのころにはかなりの学生が日本の埋草ではなく、英語の埋草を意識的に使えるようになります。でも、残念なことに、Warm-up Talk の時は改善されるのですが、一人で何かを言うよう求められるモノローグ（独白）タイプのスピーキングテストになると、1 年の後期の期末でも、学生の沈黙癖がなかなか治らないことに改めて気づかされます。相手が積極的に話しかけてくれる Warm-up Talk の時と違って、モノローグ・

1 ハルヤマダ、須藤昌子訳（2003）『喋るアメリカ人 聴く日本人』成甲書房

モードになると、日本語の癖が出てくるようです。アメリカに留学して間もなくの頃の自分の経験を思い出しても、最初の頃は、頭の中で新幹線並みのスピード翻訳を必死に行いながらネイティブとの会話を乗り切ろうとしていましたが、ついに力尽きて、翻訳することを諦めた頃、はじめて自然に英語が出てくるようになりました。ゆっくり考えながら英語を話しても何の問題もなく待ってもらえる日本では、私の学生は、当時の私同様、ほとんど全員が頭の中で超高速日英翻訳マシンを動かして英語を話していると考えられます。日本ではそれでも十分に間に合うので、小学校から英語の filler を使う練習を地道に続けていかないと、どうしても《日⇒英》変換中の頭の中から未翻訳の日本語の埋草「えっと…」などが漏れ出してきて、英語の埋草を自然に使う習慣はなかなか身につかないのではないかと思います。

小学校では、英語は不得意だという先生が沢山いらっしゃると思いますが、そういう先生方こそ、この filler 表現を子どもの前で沢山使って、子どもたちが「意味のない沈黙」を乗り越えるお手伝いをしてやっていただきたいと思います。聞き手にとって意味のない沈黙がなくなってはじめて本当に意味ある沈黙ができるようになり、英語でも “Silence is gold.” という格言を実践できる人になれます。

最後に…「実用」とは？

ここまで「小学校から始まる実用英語教育」と題して連載を続けてきました。最後に何かを言う前に、この「実用」って、いったい何なのかについて私なりの考えを申し上げておきたいと思います。

私にとって「実用」とは、「加工されていない実際の＝現実の英語が理解できるようになること」であり、必要なことを伝えるために「実際に英語が口をついて出てくるようになること」です。一言で言うと、「実用英語教育」とは「**実際のコミュニケーション場面で役に立つ英語の教育**」だということです。

では、「実際のコミュニケーション場面」とはどのような場面なのでしょうか。

実際のコミュニケーション場面とは？

それは、小学校で言えば、子どもたちが「外国語活動」で英語に触れる小学校３年生の段階で、子どもたち自身に答えさせるべき問いです。もし自分がこの日本という国の中で、英語しか話せない、英語でしか通じ合えない人たちと英語で意思の疎通を図らなければいけないことがあるとしたら、それはどんな場面なのか。そこでは、どんなことが理解できたり、言えたりしなくちゃいけないのか。それは楽しいことなのか。とても意味あることなのか。してみたいと思えることなのか。これらの問いを子どもたち自身が考え、答えを出し、外国語(英語)を学ぶことは自分自身が本当に望んでいることだということ自覚させてあげる必要があると思うのです。というのも、2年後の5年生では教科としての「外国語科」が待っています。そこでは、技能としての外国語（英語）を身につけ、習得の度合いについて評価も受けます。「覚えなくてもいい」ことが、「覚えなければならないこと」に変わってしまいます。3, 4 年生のただ楽しめれば良いだけの“英語との接触体験”とは本質的に異なります。英語を外国語として学ぶ環境の中では、ただ英語に接触してさえいれば習得できるようになるという学術的根拠はどこにもありません。あるのはそれとは逆のデータです。つまり、苦労は不可避なのです。もちろん、苦労だけでもいけません。言語の習得には、脳をリラックスさせたり、不安から解放させたり、喜ばせたりすることも必要です。では、苦労しても楽しく学べるように子どもたちを動機づけるためにはどうしたらいいのでしょう。教師ができることも様々ありますが、何にも増して強力なのは、子どもたちが、苦労や努力に値する見返りを自分自身の中で得ることです。毎回の外国語活動を通して、子どもたちが、自分自身が自分のイメージできる生活場面の中で、誰かと英語で楽しく何かをしている自分の姿を生き生きとイメージできること以上に嬉しい内的報酬はないはずです。

目的と目標

英語で楽しくコミュニケーションしている場面が最終目的としてイメージできたら、あとは、それに向かって毎回の活動を関連付けていくだけですね。英語学習を船旅に譬えてみましょう。誰でも目的地を決めてから船出しますね。目的地に着くまでに、どこの港に立ち寄ってそこで何をするのか、今停泊中の港から目的地まではどれくらいなのか、あと何日位で目的地に着けるのか、そうしたことが明確に脳裏に描かれていればいるほど、目的地までの距離や時間、それまでに遭遇するかもしれない危険や苦労のことは気にならず、楽しく航海を続けることが

できるでしょう。

目的地までの距離を知る方法

目的地は子ども自身が決められますが、今いる所から目的地までどれくらいの距離があるのか、どうすればどれくらいの日数で到達できるのか、そうしたことは十分な知識と経験を積んだ船長にしかわかりません。英語学習で言えば、それが「評価」にあたります。英語が専門でない先生方にこれはとても荷の重いことであり、訓練も経験もないのに、そうした評価を自分でできるようになることは、不可能に近いと思います。ただ、**Can-Doリストの能力記述文**と**ルーブリック評価**を使えば可能です。子どもたちに対して、「～ができるということは、きみは今ここにいるということだ」とか、「～ができるようになれば、きみはあそこに到達できるよ」というように、予め示された何かができるか否かをチェックするだけで、その判断結果をもとに子どもたちの現在位置や未来位置を予測してあげることができるようになります。「良くここまで来たね」とか「あそこまでもう少しだよ」と言って子どもたちを励ましてあげることができれば、子どもたちは嬉しいでしょうし、やる気を出すこともできます。

その意味で、子どもたちの英語習得を評価しなければいけなくなる小学校の先生がたは、言語能力の発達行程を専門家が記述したものをいつでも参照できるようにしておく必要がありますね。そのような参考資料として現在よく知られているのは、Council of Europe（欧州評議会）が作った CEFR（Common European Framework of Reference ヨーロッパ言語共通参照枠）と呼ばれる行程表ですが、私にはとても見にくい「海図」です。細かすぎて、全体像（big picture）がつかみにくい。一方、アメリカの外国語教師の集まりであるACTFL（American Council on the Teaching of Foreign Languages 全米外国語教育協会）の作成した OPI（Oral Proficiency Interview 口頭運用能力を測定するためのインタビューテスト）判定基準は、次頁の表の通り、見やすいマトリックスで表現されています。外国語能力の発達を人間の成長になぞらえて言うと、習いたて、生まれたての頃は「単語人間」で、そこから「文人間」、「段落人間」、さらに「複段落人間」へと成長していくのだということが極めてわかり易く示されています。これで、最初から無理して文を言わせる必要はない。無理して発表をやらせる必要もないということがはっきりとわかります。次頁の基準表を見て、これは面白いと思われた方はぜひ「日本語OPI研究会」のウェブサイト（http://www.opi.jp/shokai/ index. html）で研究してみてください。きっと役に立つと思います。

最後の最後に言いたかったこと

この連載を始める時、最終回で言おうと決めていたことがありました。それは、「英語が話せないのは、必ずしも英語力の問題ではなく、言うことがないから話せないのかもしれません」ということでした。英語力も大事ですが、会話力はもっと大事なのに、すぐには身につきません。小学校の頃から、子どもたちが自分の言いたいことを沢山見つけられるような話題を教員が見つけてあげて、自分の意見を思わず伝えたくなるような英語活動を組み立てていきましょう。そう締めくくるつもりでした。でも、その後、さらにもう一言付け加えることにしました。それは、次の記事を読んで思ったことでした。

****

……同調圧力が強く、日本では違う意見を言ってはいけないと彼女が強く感じたのは、中学生の時だった。

授業でピューリッツァー賞を受賞した写真「ハゲワシと少女」を見せられた時のこと。この写真は内戦化のスーダンで飢え寸前の少女が、ハゲワシに狙われているというものだ。先生の授業の雰囲気からは、「写真なんか撮っている場合ではない。まず少女を助けるべきだ」というニュアンスが醸し出されていた。その上で、先生は生徒に聞いた。写真を撮るべきだったのか、まず助けるべきだったのかと。

10人の生徒のうち9人は、まず助けるべきだと手を上げた。しかし彼女だけは、写真を撮るべきだったに手を上げた。

「この写真によって多くの人に問題を訴えることができたし、この写真家はきっとこの後少女を助けたのではないでしょうか」と。1人だけ違う意見を言った彼女は翌日から無視されるようになったという。

（中略）

ある日本人の留学生から、外国人の友達を紹介してほしいというので、食事する場をセッティングしました。ところがその人はぜんぜん話をしない。紹介してほしいと自分から言ってきたのに、自分から話そうとせず、相手から話しかけられるのをひたす

ら待っている。そんな受け身な姿勢では、会話が成り立つわけがありません。

英語力の問題ではなく、根本的に会話力、コミュニケーション力を抹殺するような教育がなされているから、英語を話す技術があっても、人に率先して話しかけることができない。

（中略）

まずは英語の前に日本語で自分の意見を堂々と言えるようにしたらどうだろう？[2]

****

つまり、何が「正しい」答なのかを周囲の空気から読み取り、「正しい」答えを言うことが望まれる文化の中にどっぷりつかっていると、言いたいことがあるのにそれを言えないように条件づけられてしまう可能性があるということをこの記事は示唆しているのです。「正しい英語」、「正しい発言」への見えない圧力が、積極的にコミュニケーションをしようとする態度の育成を阻んでいる可能性があるということです。

この可能性をつぶすためには、教える立場にある私たち教員自身がこの「違う」ということについてしっかりとした考えを持ち、それを子どもたちに伝えていくべきだと思っています。違う意見が出てくるたびにポイントをあげる。違う意見が出てきそうな質問をする。などなど、いろいろな工夫ができるでしょう。小学校の段階から大学まで、全教員が少しずつ工夫と努力を重ね、普段の日本語生活の中で、友だちと違う意見を持っていても、それを安心して口にできるというコミュニケーション環境を作っていってあげませんか。そうすれば、「正しい英語」でなくても、また、「正しくない」ことを言ってしまって人からどう思われようと、とにかく自分が言いたいことが言える日本人を育てていくことができるはずです。そして、そういう日本人の姿勢こそ、これからの国際社会の中で日本が示すべき姿勢だと思っています。小学校から始まる実用英語教育の役割は大きいのです。みんなで頑張りましょう。　完

規準＼基準	レベル	CEFRレベル	場面	話題	機能	正確さ	文構造
超級	10	C2	どんな場面でも対応できる。	どんな話題でも話せる。 専門分野の話もできる。	意見を根拠を示して説明したり，説得したりできる 仮説を立てられる。	訛りがあり，言い間違いをすることもあるが，意味の理解には全く支障がない。	**複段落** どんな長さの発話も自在にこなせる
上級	上 9 中 8 下 7	C1 B2.2 B2.1	打ち解けた雰囲気の場面なら大体どんな場面でも対応できる。 改まった場面は対処しきれないこともある。	話せる話題がかなり豊富になるが、基本的には、次のような話題について事実を語ることが中心になる。 時事的な出来事 新聞や雑誌、ニュースの話題；政治、経済、教育；**娯楽、旅行、休暇の過ごし方** 文化的、倫理的な問題；歴史；慣習など	**過去、現在、未来の出来事や状態**を描写することができる。 くだけた会話であれば、自分から主導権を取って，会話を進めることができる。 人に**手順**を示し、**指示**を与えたり、簡単な**報告**文を述べることができる。 目標言語が話されている文化の中で遭遇する可能性のある**複雑な場面**（苦情、緊急事態、難しい問題の解決方法の提案など）**を処理することができる**。 簡単な表現で、いろいろなものごとを**比較**することができる。	発音などは，日本人英語に慣れていないネイティブにも，慣れているネイティブにも，ほとんど問題なく理解できる。 訛りがあり，言い間違いをすることがあるが，ほとんどの場合意味の理解に支障はない。 時々誤解されることもあるが、総じて、語彙に困ることはなく、知らない語彙は，他の語彙で言いかえることができる。 ことばの並べ方もかなり正確で、初歩の文法も正確に使いこなされている。 難しい構造の文を話そうとすると間違いを犯すが、間違いのパターンは一定している。	**段落** 短い文を切れ切れに離すのではなく、まとまりのある段落を校正しながら、話しを組み立てることができる。
中級	上 6 中 5 下 4	B1.2 B1.1 A2	打ち解けた雰囲気の場面で，自分と話し相手に関する話題が中心なら対応できる。 それ以外の複雑な場面には対処できない。	生きていくために必要な用を足すことができる。 自分の個人情報・生い立ちに関わる情報 レストラン・食事；道案内をしたり、されたりする **日常的にしていることや趣味**、交通手段、電話での会話、自分の住まいや旅先での宿泊、お金にかかわる会話 健康衛生に関わる話題；郵便局での会話 数字の１～1,000 慣習として行なっていること；買い物をするちょっと改まった話題を扱うことができる。 あいさつ、自己紹介、予約を取る、人と会って話しをするための事前手配をする、人の誘いを受けたり、断ったりできる ちょっと改まった決まり文句を言うことができる。	聞いたことがない英語表現を必要に応じて自分でつくることができる。 自分の馴染みがない話題や丸暗記している語句で扱えない話題を扱うために**必要な英語を自分で考え出す**ことができる。 **相手の質問に答えたり，相手に質問をしたり**して、短い会話をすることができる。 生きていく上で不可欠な目的を遂行するために、自分からことばをかけ、その場を何とか切り抜けて、目標を達成することができる。 **習った英語を新しい場面で応用**することができる。	発音などは，日本人英語に慣れていないネイティブにはわかりにくいが，慣れているネイティブにはほとんど問題なく理解される **基本的な文構造を使っている限りは、かなり正確な英語**を話せる。 社会言語学的な知識も見受けられる。 語彙は、くだけた場面でよく使われる日常用語に限られている。	**文** 単文構造の短い文をつなぎながら、会話が続く。定型句が多い。
初級	上 3 中 2 下 1	A1 0 0	どんなことが起こるか予測が容易な日常場面なら対応できる。	日常生活に関する次のような話題 家庭、職場、学校 曜日や年月日，天候 自他に関する基本的な事実 出会いと別れ際の挨拶	もの、人、場所の名前をいうことができる。 聞かれること中心の簡単な会話ができる	**単語や丸暗記の語句や，自分がとても言いなれた語句**を主に使いながら、大体何が言いたいのかがわかるような話しができる。 ただし、日本人英語になれているネイティブでも理解に支障をきたす誤りが多い。	**単語** １～２語程度の単語をつないで発話する。 情報を箇条書き的に並べて言ったり、数え上げたりするようにして相手に伝えることはできる。

上の OPI-CEFR 間対応は https://www.actfl.org/sites/default/files/reports/Assigning_CEFR_Ratings_To_ACTFL_Assessments.pdf　より引用

[2] メールマガジン「本城武則【EQ 英会話】」2013 年 12 月 19 日版より抜粋

◆ お知らせ

6 月 29 日(土)に第8回 SPELT 研究会を開催します！

例年、研究会は 10 月に実施していましたが、次回の研究会は 2019 年 6 月 29 日（土）に「〜話す力の原点としての発音指導再訪〜」をテーマに実施します。研究会には、2015 年 10 月研究会でのワークショップ以来待ち望まれていた古田智隆氏をお招きし、《手でつくる発音》第 2 弾を実現します。研究会の会場及び時間などの詳細は、後日お知らせします。発表も募集しますので、奮ってご参加ください。

多くの皆さんのリクエストにお応えして、古田メソッドの再登場！

《手で作る発音》ワークショップ　第 2 弾　<u>6 月 29 日(土)/ SPELT</u>

英語を聞く・話すための手で作る発音 ― Elementary Session Part 2 ―

カレンナチュールジャポン　ボイスワーク・トレーナー　古田 智隆（のりたか） 氏

<u>概要</u>： 近年は優れた多くの発音練習方法が考え出されているが，唇の形，表情筋の動き，唇の合間から見える舌の動きなど，外から見える部分での練習方法が主になっている。母音や子音を作る際に重要となるのは，舌の動きだが，舌は口の中にあるため可視化することが難しく，舌を思い通りに動かすことは，非常に難しい。そこで，ストレスなく思い通りに舌を動かすことができればと考案したのが《手で作る発音》である。音を作り出せる，すなわち，発音できるようになれば，その音は聞こえてくる。最初は，アルファベット 1 文字かもしれないが，それが 2 文字になり，3 文字になり・・・点が線へと繋がっていく。単語の意味はわからなくても，英語の音を言語として脳が認識し始めるようになる。発音できない音は言語として認識しづらい。日本人の耳には，日本語を言語音，それ以外の言語音を雑音と認識する〈好み〉ができあがっている。英語の音を雑音として認識したままでは，聞き取ることや話すことはできない。英語の音を自分が作る言語音として作れるようになれば，英語の音を言語音として認識し，聞き取れるようになる。英語をカタカナ読みするのではなく，最初からネイティブと同じように舌や唇・表情筋を動かして，正しい発音をつくり出せるように指導できることが英語教師にとって欠くことのできない技能と考え，そのような指導ができるようになるための方法の基礎を紹介する。

<u>プロフィール</u>：1969 年生まれ。北海道出身。東京レコーディングスクール卒業後，（株）HAM に入社。数々の名編曲家・アーティストから多くの教えを受ける。作曲・編曲活動のために，1992 年よりフリーランス。94 年からは，ボイスワークトレーナーとしてのキャリアをスタートさせ，ポップス，ロック，クラシックと幅広いジャンルの歌手，コーラスグループ，俳優，ナレータのボイス・トレーニングを手掛けるかたわら，全国各地でセミナーも開催している。プロからアマチュアまで，また，就学前児童から高齢者まで，さらには，音楽関係者から英語教師や同時通訳者まで，まさにあらゆるニーズのボイストレーニングにかかわっている。作曲･編曲者としては，樹里からん，古澤 巌，KoN，口笛太郎 Duo，松本俊明，夏木マリ，森昌子，石井聖子，桑田靖子，平井真美子，久保田洋司，黒澤秀樹，土井晴人，押谷沙樹，梶原 聡，TREACLE WELL，FUGA，横田裕一(Counter tenor)らの作品にかかわる。コンサドーレ札幌のオフィシャル・ジングルなど，CM や TV 番組，ラジオ番組などの制作も多数手掛けながら，NHK BS の「うたのなる木」，テレビ朝日の「少年少女 B」などに音楽講師役として自らサブレギュラー出演もしている。舞台音楽の分野でも，作曲・編曲者として，また，舞台音楽監督として活躍している。北海道舞台塾の「先進的創造活動プロジェクト“エア”」，Theater I'm の「卑弥呼」をはじめ，市町主催の市民参加型ミュージカルにも多数参加し，日本の演劇活動の普及にも貢献している。

6 月来道時の予定

6 月 28 日(金)　13：00 〜　千歳緑小学校にて 6 年生のワークショップ
　　16：30 〜　札幌学院大学にて（教職課程履修者対象。18：00 まで）

6 月 29 日(土)
　13:00 〜　実用英語教育学会ワークショップ（会場･開始時間未定）
　18：30 〜　ワークショップと懇親会
　もぐら英会話教室@ランチ&カフェ　もぐらキッチン
　札幌市中央区北 1 条西 7 丁目 1−11　地下 1F 広井ビル（STV 隣）

6 月 30 日(日)　13：00 〜　ＮＰＯ千歳メセナ協会にて音楽会とワークショップ

その他のお知らせ

◆ ホームページもご覧ください

実用英語教育学会のニュースレターや紀要などがアップされています。こちらです⇒http://spelt.main.jp/

◆ 会員募集のお知らせ

実用英語教育学会では2019年度新会員を募集しています。年会費は一般会員4,000 円(学生,院生3,000 円)です。

◆ 新規入会の申込手続き

メール（電子メール）による入会申込みあるいは郵便振替による会費納入によって、入会手続きを完了することとさせていただきます。メールのメッセージ本文に下記の必要事項をご記入いただき、事務局までご送信ください。なお、SPELT のホームページのフォーム(FORM)を使って申込手続きを行うこともできます。

・漢字御氏名（例：　北海　道子）

・ローマ字御氏名（例：　HOKKAI Michiko）

・御住所（郵便番号を含み、都道府県から始めて御記入願います。なお、その御住所が【自宅】か【勤務先】か、【公開】か【非公開】かの別を明記してください。）

・御電話（半角英数でハイフンを付けて下さい。御住所同様、【自宅】・【携帯】・【勤務先】の別、並びに、【公開】・【非公開】の別を明記してください。）

・御所属（大学生、大学院生の場合は【学生】と明記して下さい。）

・メールアドレス（普段からお使いのものを御記入ください。また、携帯電話のメールアドレスはなるべく御遠慮ください。【自宅】・【携帯】・【勤務先】の別、【公開】・【非公開】かの別も明記してください。）

・年会費納入の手続き

学会事務局（下記口座）まで、必ず送金者氏名を明記のうえご送金ください。なお、恐れ入りますが振込み手数料は各自でご負担願います。

【名義】実用英語教育学会

ゆうちょ銀行　記号　１９０６０　番号　１０３１２６２１

※他の金融機関から振込みする場合

【店名】九〇八（読み　キュウゼロハチ）

【店番】９０８　【預金種目】普通預金【口座番号】１０３１２６２

編集後記

今回は、第８回研究大会の様子をお届けしました。基調講演やフォーラムでは、参加者から活発なご意見をいただきました。研究大会で得たエネルギーを新年度の授業に活かしていきましょう。

実用英語教育学会

編集：*SPELT Newsletter* 編集委員（石川希美・久野寛之・杉浦理恵）

発行：2019 年 3 月 31 日

事務局：〒065-8567　札幌市東区北 16 条東 9 丁目 1 番 1 号

札幌大谷大学社会学部地域社会学科 石川希美 研究室内

TEL: 011-742-1969（直通）Fax: 011-742-1654（代）

Email: info◎spelt.main.jp　※◎を@に変更してください。